

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00684

研究課題名（和文）パフォーマンス評価に基づく外国語オンライン教育の高大連携および国際協働による研究

研究課題名（英文）Research through performance evaluation-based analyses of high school-university coordination and international collaboration in online foreign language education

研究代表者

吉川 龍生（YOSHIKAWA, Tatsuo）

慶應義塾大学・経済学部（日吉）・教授

研究者番号：30613369

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、外国語教育においてもオンライン授業実施を迫られ、結果的にオンライン授業は身近なものになった。そこで、オンラインの授業形態と、パフォーマンス課題・評価を中心とした教育方法を組み合わせ、ポストコロナの外国語教育でも最大限活用していくための実践研究を行った。教育方法の上での高大連携・高大接続に留意し、海外での取り組み事例にも目を向けながら実践研究を行い、その成果を書籍『外国語教育を変えるために』（三修社、2022）の形で公開し、単純にコロナ前に戻るのではなく、より良い教育を目指して進んでいくための理論やアイデアを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的には、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）の提唱する複言語・複文化主義や自律学習などの重要理念を踏まえてICTを活用した教授法を構築し、海外の先行事例なども積極的に参照しながら理念を実際の授業の中に落とし込んで実践研究を行い、その効果や可能性について実証的に考察できたことは意義が大きい。社会的には、新型コロナウイルス感染症の世界的流行とそこから回復する過程の中で、コロナ禍で脚光を浴びたオンラインを使った教育を、日本の教育現場で実現可能・持続可能なレベルで採用・活用する具体的な方策を考え、書籍の形で広く社会に提言することができた点は、特に大きな意義を有していると言える。

研究成果の概要（英文）：The coronavirus pandemic forced many academic institutions to provide foreign language instruction online. As a result, online lessons became an increasingly familiar part of the educational environment. Following these developments, the authors combined online lesson formats and educational methods focused on performance tasks/ performance evaluation to conduct practical research which aimed to maximize the utility of foreign language education in the post-pandemic environment. This practical research took account of the need for collaboration and continuation between the educational methods used at high schools and at universities, while also referencing examples of relevant initiatives implemented outside Japan. The research results, which were published in “Changing Foreign Language Education” (Gaikokugo kyoiku wo kaeru tameni; Sanshusha, 2022), presented, as an alternative to simply returning to pre-pandemic practices, theories and ideas for improving foreign language education.

研究分野：外国語教育

キーワード：外国語教育 オンライン授業 LMS パフォーマンス評価 CEFR ICT

1. 研究開始当初の背景

平成 30 年に高等学校の新しい学習指導要領(以下、新指導要領と表記)が告示された。その中では「主体的・対話的で深い学び」が打ち出され、外国語教育については「文法はコミュニケーションを支えるもの」「四技能五領域」「言語の使用場面」という方針が示されている。これによって高等学校の外国語教育が大きく変わることが予想される一方、背景を成す CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)がどこまで理解されているのかも含め、その内容や実効性を検証する必要も生じた。

新学習指導要領で示された幾つかの方向性は、本研究課題参加者も様々な形で関わった『外国語学習のめやす—高等学校の中国語と韓国語教育からの提言—』(2013 年)がある程度内容を先取りしている側面がある一方、その際に有効であると思われるパフォーマンス評価については、京都大学の西岡加名恵氏のグループによる一連の研究(『パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる—学び力を育てる新たな授業とカリキュラム』、2017 年など)や、その理論的背景をなすグラント・ウィギンズらの逆向き設計論(『理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法』、2012 年)の参照・検討を行う必要があった。

幸い、本研究課題参加者は文部科学省の「外国語強化地域拠点事業」や「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」に参加することで、上記のような問題意識による研究を行うことができていた。そして新学習指導要領が示す資質・能力の三つの柱の育成という部分に注目し、中学校・高等学校の外国語教員と連携し、中国語・韓国語・ドイツ語・スペイン語・フランス語について、逆向き設計によるパフォーマンス評価を取り入れた授業の開発・実践を行っていた。とはいえ、これら新学習指導要領下で教育を受けた生徒を、将来的に大学が受け入れて学生として教育するにあたって、中等教育と高等教育との間にある断絶を理論面、実践面ともに埋める必要があった。

このことと並行して、2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の流行で多くの中学校・高等学校・大学で外国語教育をオンラインで行う事態となった。本研究が目指す外国語教育の教育モデルはパフォーマンス課題とその評価に基づくものを前提としていたが、従来のパフォーマンス評価は対面授業が念頭にあり、オンライン授業での応用は未知数の段階にあった。しかし一方で、オンラインだからこそパフォーマンス評価がより重要になるという、一見矛盾する問題もクローズアップされた。従来の受動的な学習のあり方では記憶を問う試験に頼る面があったが、オンラインでは学習者が自宅で教材を参照できるので、そうした試験の実施が困難になったからである。

また世界各国が同様の状況にあるため、外国の外国語教育研究者と連携する必要も生じた。こうした状況を背景として、高大連携を図りながら同時に海外の研究者とも協力し、外国語オンライン授業におけるパフォーマンス評価の研究・開発を行う本研究計画が着想された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、オンライン授業の提供と「アフターコロナ」における授業態勢の変革が予測される時代にあって、「主体的・対話的で深い学び」やパフォーマンス課題といった対面授業を念頭に検討されてきた教育法をオンライン授業の中に組み込んだ、具体的な教育システムの開発を行うことにあった。

まず、新学習指導要領の告示の背景には、教育において知識の習得よりも資質や能力の育成を重視すべきという、先進国を中心としたコンピテンシー・ベースの考え方への教育理論の転換がある。加えて、特にヨーロッパ言語の外国語教育において重視される CEFR は、自律学習や行動中心主義といった理念を根幹に持ち、外国語教育において伝統的な知識伝達型の受け身の教育から、学習者の自発性を引き出し自律性を涵養する教育への転換が、日本の外国語教育においても喫緊のものと考えられるようになった。その上で、本研究では、アジア圏とヨーロッパ圏の外国語教育研究者が協働することで、教養課程に属することが多く、また言語ごとに縦割り状態となっていることの多い大学の外国語教育に横断的に適用可能な新たな教育理念の枠組みを構築することを目指した。

一方、従来、オンラインによる外国語教育の研究とそれに基づく運用は、もちろんこれまでも様々に行われてきた。しかしその多くはフルスペック指向とでもいべきもので、十分な設備および通信環境の元で、PC の操作に長けた外国語教員と学習者の間で行う、という性格が強かった。それは、多くの授業がいわば従来型の対面方式で行われる中で、オンライン授業は全体の中のごく一部ということが前提になっていたことも関係している。またそこで行われる授業自体も往々にして先進性が追求される傾向にあり、今なお大多数を占める伝統的な言語教育の信奉者と対話を行い、これを取り込むといった態度に欠けていた側面もある。

しかし新型コロナウイルスの流行によって対面授業との割合が逆転し、決して PC に長けているわけではない一般の外国語教員や外国語学習者がオンライン授業を行うことになった結果、より広く実現可能・持続可能な教育モデルが求められることになった。また、オンライン授業にも一定の利点があることが認識されたことで、「アフターコロナ」においては対面とオンライン

を何らかの形で組み合わせる「ハイブリッド」の形式が定着することが予想された。その場合、どのように両者を有機的に結びつけ、効果的な教育を行うかが問題となると考えられた。

そこで必要なのは、例えば教材や成績の管理ツールとしての LMS の使用に関わる表面的・皮相的なサジェスションではなく、LMS が本来的有する学習者の学習活動を誘発する場としての性質に着目した提言であり、それは「主体的・対話的で深い学び」とも高い親和性を持っている。本研究はこの点にも注目しつつ、CEFR の複言語主義や逆向き設計論の検討を行い、それらを元にした実践的運用として、パフォーマンス評価を中心としたオンラインによる外国語教育法を、汎用性を確保した体系として開発し、さらにこれを具体的な提言として示すことを目的とした。

当然のことながら、上記のような状況は特定の外国語にのみ存在するわけではない。しかし外国語教育の研究は、特に本邦においては言語ごとに行われる傾向があるため、ある言語の教育研究において得られた成果が、別の言語の教育者には全く知られていないということが多く発生している。もちろん言語によってその特性が異なる以上、教育法も違ってくるのは確かであるが、一方で共通する手法が存在するのも確かであり、特にオンライン教育およびパフォーマンス課題という問題についてはそうした要素が強い。さらに新型コロナウイルスの流行による授業のオンライン化は、何も国内の大学に限るわけではなく、中等教育においても実施されている上、諸外国でも採用されたものであり、同様の問題意識を持つ教育者・研究者は国内の中学校・高等学校や、海外の教育・研究期間にも多数存在していた。

そこで本研究では、様々な外国語の教育を担当する研究者が集まり、国内の中学校・高等学校の教員や、諸外国の外国語教育・研究者とも連携を取って、共同で研究を進めることとした。こうした言語横断的かつ、教育課程縦断的な枠組で研究を行うことは、本研究が持つ優れた学術的独自性である。またそこで指向される、これまでさまざまに行われてきた「主体的・対話的で深い学び」についての議論や実践を踏まえたオンライン教育の開発は、本研究の持つ大きな創造性と考え、このような目的が設定された。

3. 研究の方法

本研究では、高大連携および国際協働によって、パフォーマンス評価に基づく外国語オンライン教育の開発をすすめた。そのために以下のような研究方法・活動の分担体制をとった。

(1) CEFR や逆向き設計論、関連教材の分析・検討（一部追加）

研究分担者・境の統括の下、パフォーマンス評価を中心とした授業の設計のために、その基礎となる CEFR や逆向き設計論に関わる先行研究の分析と再検討を行い、定期的に会合を開いて議論を行った。関連教材の分析については、令和 4 年度からメンバーに加わった研究分担者・金が、韓国朝鮮語の教材を中心に作業をすすめた。これら理念的研究の成果は、パフォーマンス課題・パフォーマンス評価や、反転授業、および後述する LMS の活用などさまざまな形で授業の場で実践の次元に移し、さらにそこからのフィードバックを得て議論を深めるプロセスによって、異なる言語であってもある程度の共通性が見出せることを確認した上で、論文や報告という形で成果発表を行なった。また、ここでの議論が執筆した書籍『外国語教育を変えるために』の理念的根幹を形成するものとなった。

(2) 国内外の様々な LMS・オンライン教育ツールの調査・分析

研究分担者・山下の統括の下、国内外で使用されている LMS やオンライン教育ツールについて、採用状況・設定可能項目・機能などを調査してメンバー内で共有し、成果をまとめた書籍の執筆時に活用した。

(3) 国内の中学校・高等学校における外国語教育担当者、および海外の外国語教育研究者との意見交換

研究分担者・縣の統括の下、国内の中学校・高等学校における外国語教育担当者として慶應義塾大学で文部科学省委託事業（「外国語教育推進事業」「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」）を実施した際のメンバーを中心に、意見交換や議論を行った。また、2 年目に書籍を刊行したことで、メンバーが様々な教育機関の FD 研究などに招聘されたこともあり、その中で意見交換も行った。

海外の研究者との意見交換は、研究代表者・吉川が連絡をとり、以下の外国語教育研究者とオンラインでの研究集会を行った。

Howwee Ng（英・ウエスミンスター大学）/ Chin-hui Lin（独・フンボルト大学）

(4) 国内外における様々な外国語授業（オンライン / 対面）の事例調査および見学

研究代表者・吉川の統括の下、外国語教育授業の事例調査と見学を行った。本研究の研究期間半ばから、新型コロナウイルスの感染状況が沈静化してきたことにより、国内外で対面授業の見学も行うことができ、模擬授業やワークショップを行い意見交換することもできた。

(5) 成果書籍の刊行（追加項目）

上述の当初の計画書にあった項目に加え、本研究の 2 年目にそれまでの成果をまとめた書籍を刊行することになり、研究代表・吉川の統括の下で作業を進め、令和 4 年 12 月に『外国語教育を変えるために』（三修社）を刊行した。書籍の刊行を当初計画より早めたのは、コロナ禍の沈静化がメンバーの想定よりも早くすすみ、外国語授業も対面授業に戻りゆく情勢の中で、単にコロナ禍以前に戻すのではなく新たに得られた知見や経験を活かした教育に変えるべきとの主張を、タイムリーかつ極力インパクトのある形で（単なる報告書ではなく）打ち出す必要があると判断したからである。

上記の研究活動項目を研究体制として示すと以下ようになる。

吉川	研究統括 授業見学・調査担当	国内外の外国語授業の事例調査および見学の調整 研究成果書籍の刊行作業の取りまとめ
境	理論研究担当	CEFR・逆引き設計論などの分析・再検討
山下	LMS・オンライン教育ツール分析担当	国内外の LMS・オンライン教育ツールの採用状況および機能の調査・分析
縣	研究協力者担当	国内外の外国語教育研究者との意見交換の連絡・調整
金	教材分析担当	韓国朝鮮語を中心とした教材の分析

4. 研究成果

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大は、外国語教育にも大きな影響をもたらした。オンライン授業に不向きとされていた教育機関においても、オンライン対応を迫られた。初等・中等教育においては、教育のデジタル化を促進する GIGA スクール構想が動き出していたこともあり、さまざまな問題を抱えながらも、結果的にオンライン授業が身近な存在になっていった。オンライン授業には長所もあれば短所もあるが、コロナ以前の外国語教育が抱えていた課題を解決するのに有用な面もあり、また教員の側がコロナの期間に多大な労力をかけて習得したスキルもあることから、社会活動がコロナ以前と同様に戻ったとしても、オンラインを活用すべきだとの観点に立ち、研究をすすめ成果の発信を行うことができた。

本研究の最終年度には、新型コロナウイルスのパンデミックも終息状態となっていた。研究期間を終えた現時点から振り返って見ると、本研究はそのような世界的な危機的状況をただ乗り切るのではなく、危機の中で要請された教育の状況を深く省察することで、それ以降の平常状態においても継続すべき側面を理論化し、ノウハウとしてある程度確立することができたと言える。

また、本研究のもう一つの大きな動機であった教育理論の転換に伴う大学の外国語教育に関する横断的な理論の構築に関しては、大きな進展があった。共同研究を通じて、大学における外国語教育が言語縦割りの状況により孤立状態にあること及び教養科目としての外国語教育の具体的な到達地点が明確化されていないことを明確化することができた。その上で、高等教育においても初等中等教育における新学習指導要領下での教育と一貫性を担保すべきという観点から、大学の外国語教育が言語を問わず自律的学習者の養成を目指すものとなるための理論的・実践的枠組みを構築した。その際に特に重要視されたのは、これまでの大学の外国語教育が学習者に放任的な立場をとり消極的に自律性を重んじてきた立場から、積極的に学習者の自発的な自律性を引き出す立場へと転換する必要性である。

従来、外国語教育においては、学習者のアセスメントに基づき習熟度にふさわしい授業を提供するという発想での、高大連携・高大接続が模索されてきた面がある。大学入学時にいわゆるプレースメントテストなどを行い、受講するレベルを確定するような方法である。それに対して、オンラインを活用したパフォーマンス課題・パフォーマンス評価を採り入れることで、教育方法上の一貫性を確保する高大連携の可能性も見えてきた。また、コロナ以前からオンラインを活用した取り組みをしているイギリスやドイツの教員たちとのやりとりを通じて、反転授業の展開の仕方など、日本でも応用できるものは積極的に採り入れて実践研究に繋げてきた。従来の教授法にデジタルの利点を加えることで、実効性と独自性を兼ね備えた教授法を実践の場に投入することが可能となった。

成果の発信という面では、複言語・複文化主義や行動中心主義的な考えに立ち、文法学習を中心とした知識習得型シラバスから、コンピテンシー・ベースの場面シラバス・概念機能シラバスへと移行すべく、パフォーマンス課題・パフォーマンス評価を中心とした教育方法と、オンラインツールを活用した授業形態とを組み合わせることで、ポストコロナの時代に外国語教育をより良いものにしていけるようなアイデアを出すことができた。学習者の自律性と積極性を引き出し涵養するという意味でも、コロナ状況下でのオンライン授業実践で試みられた反転授業やオンライン型パフォーマンス課題などの授業のあり方は、先に述べた自律的学習者の育成という観点でも、アフターコロナに引き継ぐべき授業ノウハウだと考えられた。また、早い段階で成果発信を始めることができたことにより、アイデアを極力実践に移してフィードバックを得て更なる改良に繋げるという取り組みを行うこともできた。そうした授業実践に基づいて執筆された論文及び報告は 25 本、研究発表は招待発表も含め 25 件にのぼった。

さらに特筆すべきは、理論的・実践的研究の成果として、境一三・山下一夫・吉川龍生・縣由衣子『外国語教育を変えるために』（三修社、2022 年）を刊行できたことである。この書籍は 5 章からなり、第 1 章では大学の外国語教育が前提として持つべき新学習指導要領におけるコンピテンシー・ベースの理念と逆引き設計形式の授業計画のあり方について詳らかにし、続く第 2 章では、この理念に基づくパフォーマンス課題・評価の実践的な取り入れ方を具体的な授業例とともに示した。第 3 章では、もう一つの理論の柱である CEFR の複言語・複文化主義とメタ言語能力の考え方について、その歴史的な変遷と日本における状況も交え提示した。第 4 章では、この研究を通じて実践・調査したオンライン授業についてアフターコロナに継承すべき理念的側面を明らかにしつつ、授業への導入への具体的な例を示した。最後の第 5 章では、包括的な授業全体を転換することが困難な場合に、部分的に導入可能な授業案を具体的なモデルと

して紹介した。単純にコロナ前に戻るのではなく、大学の外国語教育が自律的な学習者の養成を目指し、教員が新たに身につけたスキルを活かして進んでいくための理論やアイデアを提示することができたと言える。

上述の書籍刊行に合わせてシンポジウムも開催したが、それをきっかけにプロジェクトメンバーへの講演依頼もあり、研究成果の公開にも力を注いだ。特に、その中にはさまざまな大学の依頼によるFD講演が含まれる。このことは、個々の研究者や教員だけではなく、大学の学部や学部の外国語部会レベルが有する問題意識に応答する内容を、本研究プロジェクトが成果として出すことができたという証左に他ならないと考える。その意味において、本プロジェクトの研究は、新型コロナウイルスのパンデミック終息とともにその意義を終えるものではなく、ますます複雑化しさらに分断が進むことが明らかになりつつある世界情勢のなかで、多様性を担保し相互理解を構築する重要な手段の一つである言語を教育がどのように捉えるかという点において、その意義をさらに増していくものと考えられる。

以上のような状況から、研究開始当初の目的を十分に果たし、想定以上の成果を残すことができたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計25件（うち査読付論文 20件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 Kazumi Sakai	4. 巻 58
2. 論文標題 Welche Kompetenzen und Fertigkeiten wollen und sollen wir vermitteln? Einblicke in die neuen Studienrichtlinien des MEXT fuer Schulen	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 LeRuBri Zeitschrift fuer Lehrende in Japan	6. 最初と最後の頁 10-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 境一三	4. 巻 999
2. 論文標題 私たちは今「文法」をどう捉えるのか？ シンポジウム「ドイツ語授業における文法規則の明示的指導の役割」の報告と考察	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本独文学会研究叢書	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 境一三	4. 巻 28
2. 論文標題 シンポジウム「ドイツ語授業における文法規則の明示的指導の役割」開催趣旨説明と報告	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ドイツ語教育	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金景彩	4. 巻 19
2. 論文標題 言語ナショナリズムと言語教育の拮抗 植民地解放後の朝鮮における朝鮮語教育論を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 慶應義塾外国語教育研究	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Sungwoo Kim・Kyongche Kim・Moran Kim・Jin-gyu Kim・Ki-in Chong	4. 巻 156
2. 論文標題 K-pop ミュージックビデオを活用した韓国語および韓国文化のマルチリテラシー教育 概念的土台と批判的リテラシー教授学習モデルの検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現象と認識	6. 最初と最後の頁 17-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 吉川龍生, 荻野友範, 深谷圭助	4. 巻 22
2. 論文標題 高等学校での実践データに基づく 中国語「辞書引き学習」導入パッケージ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 中国語教育 (中国語教育学会)	6. 最初と最後の頁 139-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 縣由衣子, 藤田邦彦, 新谷真由	4. 巻 42
2. 論文標題 非英語専攻学生の英語学習に関する心理的機序とメタ認知能力の因果性を探る	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本教育工学会2023年春季全国大会 (第42回大会) 講演論文集	6. 最初と最後の頁 541-542
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田邦彦, 新谷真由, 縣由衣子	4. 巻 43
2. 論文標題 自由記述で探る非英語専攻学生の国際的志向性と動機付け	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本教育工学会2023年秋季全国大会 (第43回大会) 講演論文集	6. 最初と最後の頁 415-416
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新谷 真由, 縣由衣子, 藤田邦彦	4. 巻 9
2. 論文標題 非英語専攻学生のマインドセットに着目した心理的諸要因と英語習熟度の因果関係の解明	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日英言語文化研究 (in printing)	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下一夫, 吉川龍生	4. 巻 18
2. 論文標題 多様な“中国語”を受容可能にする授業へ ドイツの大学における中国語の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 慶應義塾外国語教育研究	6. 最初と最後の頁 19-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荻野友範, 吉川龍生, 深谷圭助	4. 巻 18
2. 論文標題 高等学校の中国語授業における辞書引き学習導入実践 紙の辞書とオンラインツール活用の試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 慶應義塾外国語教育研究	6. 最初と最後の頁 41-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 深谷圭助, 吉川龍生, 王林鋒, 関山健治, 廣千香, 水本良恵	4. 巻 15
2. 論文標題 中学校英語科における辞書引き学習実践に関する研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 51-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 縣由衣子	4. 巻 18
2. 論文標題 外国語教育における「資質・能力」から パフォーマンス課題および評価を考える 文部科学省委託事業 「教員養成機関等との連携による 専門人材育成・確保事業」研究成果報告	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 慶應義塾外国語教育研究	6. 最初と最後の頁 67-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 縣由衣子, 新谷真由, 藤田邦彦	4. 巻 -
2. 論文標題 英語学習における心理的学習機序と習熟度の関係性のパス解析による解明 動機づけ, 自己効力感, 授業不安, 国際性の視点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第 21 回第二言語習得学会国際年次大会抄録	6. 最初と最後の頁 15-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下一夫, 山下誠, 吉川龍生	4. 巻 17
2. 論文標題 外国語教育における三つの資質・能力とパフォーマンス評価 慶應義塾大学外国語教育研究センター研究プロジェクト「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 慶應義塾外国語教育研究	6. 最初と最後の頁 175-200
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 縣由衣子, 境一三	4. 巻 17
2. 論文標題 慶應義塾大学外国語教育研究センター研究プロジェクト「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」における高大協働による取り組みとその実践例	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 慶應義塾外国語教育研究	6. 最初と最後の頁 127-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 深谷圭助, 吉川龍生, 関山健治	4. 巻 14
2. 論文標題 イギリスの公立小学校における辞書引き学習の導入と教師の学び	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代教育学部紀要 (中部大学現代教育学部)	6. 最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 境一三	4. 巻 25
2. 論文標題 オンライン授業の可能性について コロナ禍状況での実践を振り返って	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ドイツ語教育	6. 最初と最後の頁 13 - 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 境一三	4. 巻 162
2. 論文標題 やさしい日本語と機械翻訳による言語意識の向上について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 147 - 160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 猿橋順子, 飯野公一, 境一三	4. 巻 17
2. 論文標題 東京を拠点とする韓国伝統芸能従事者の言語への態度 言語政策研究への発展可能性の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語政策	6. 最初と最後の頁 83 - 102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 境一三	4. 巻 61
2. 論文標題 コロナ時代とその後の教育－虚と実の間－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ひろの	6. 最初と最後の頁 28 - 29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 境一三	4. 巻 2
2. 論文標題 複言語主義に基づく第二外国語教育 資質・能力論を手がかりに考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 外国語教育研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 213 - 218
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 境一三	4. 巻 9
2. 論文標題 書評 『CEFR野理念と現実 理念編 言語政策からの考察』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 複言語・多言語教育研究	6. 最初と最後の頁 176 -176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 境一三	4. 巻 62
2. 論文標題 日本の外国語教育で複言語・複文化を実践する 慶應義塾の挑戦	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学	6. 最初と最後の頁 1 - 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 境一三	4. 巻 62
2. 論文標題 慶應義塾大学日吉キャンパスにおける私のドイツ語教育	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学	6. 最初と最後の頁 13-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計36件 (うち招待講演 14件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 境一三
2. 発表標題 楽しいことばを巡る旅路 -少年時代からの記憶をたどる-
3. 学会等名 JACTFL 特別講演会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 境一三
2. 発表標題 『ドイツ語科教育法』では何を教えるのか? 2022年度の実践を例に
3. 学会等名 ドイツ語教育の未来を拓く - 持続可能なドイツ語教育に向けて (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazumi Sakai
2. 発表標題 Welche Kompetenzen und Fertigkeiten wollen und sollen wir vermitteln? Einblicke in die neuen Richtlinien des MEXT
3. 学会等名 DAAD-Fachseminar Inhalts- und handlungsorientierter DaF-Unterricht (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 境一三
2. 発表標題 CEFRの複言語主義とメタ言語能力
3. 学会等名 科研費公開講演会『外国語教育を変えるために』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 境一三
2. 発表標題 複言語で生きる 多言語・多文化化する社会における言語教育の役割について
3. 学会等名 日本大学大学院ドイツ文学専攻特別講義（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 縣由衣子, 山田仁
2. 発表標題 フランス語授業における反転授業とパフォーマンス評価に関する実践報告
3. 学会等名 5e Journee pedagogique de la langue francaise (日本フランス語教育学会主催)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 縣由衣子
2. 発表標題 ポストコロナ期の第二外国語教育について-コロナ期の「試行錯誤」をどのように生かしていくか
3. 学会等名 神奈川大学地域言語教育部会FD講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金景彩
2. 発表標題 教材としてのK-POP MVの可能性 新しいリテラシー教育の観点から
3. 学会等名 外国語教育学会第26回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉川龍生
2. 発表標題 中国語辞書引き学習の導入実践報告
3. 学会等名 2022年高等学校中国語教育全国大会（第39回高等学校中国語教育研究会全国大会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉川龍生
2. 発表標題 アフターコロナの外国語教育
3. 学会等名 科研費公開講演会『外国語教育を変えるために』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山下一夫
2. 発表標題 変わる外国語教育・変える外国語教育
3. 学会等名 科研費公開講演会『外国語教育を変えるために』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 縣由衣子
2. 発表標題 評価可能なパフォーマンス
3. 学会等名 科研費公開講演会『外国語教育を変えるために』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 縣由衣子
2. 発表標題 慶應義塾大学外国語教育研究センターにおける文科省委託事業プロジェクト報告
3. 学会等名 文京学院大学2022年度第二外国語分科会FD講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金景彩
2. 発表標題 大学における第二外国語教育の意義
3. 学会等名 文京学院大学2022年度第二外国語分科会FD講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 新谷真由, 藤田邦彦, 縣由衣子
2. 発表標題 英語習熟度に着目した心理的諸要因の因果関係の解明 自己効力感, 不安, 国際的志向性, 動機付けの連関をパス解析で探る
3. 学会等名 日本教育工学会2022年秋季全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 縣由衣子, 藤田邦彦, 新谷真由
2. 発表標題 非英語専攻学生の英語学習に関する心理的機序とメタ認知能力の因果性を探る
3. 学会等名 日本教育工学会2023 年春季全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Mayu Janssens-Shintani, Yuiko Agata, Kunihiko Fujita
2. 発表標題 Japan's low-proficient English learners convinced of having fixed abilities: source of high anxiety and low confidence
3. 学会等名 International Convention of Psychological Science 2023, Brussels Convention Centre.
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Linfeng Wang , Yuko Takeishi, Keisuke Fukaya , Tatsuo Yoshikawa, Kenji Sekiyama
2. 発表標題 A Collaborative Case Study of Effects of Common Language Learning Strategy Model in English Classes at a Junior High School in Japan
3. 学会等名 WALS 2021 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山下一夫
2. 発表標題 文部科学省委託「グローバル化に対応する外国語教育の推進」事業 - 英語以外の外国語教育に取り組む高等学校の実践を中心に - 慶應義塾大学の取り組み
3. 学会等名 JACTFL/SOLIFIC主催第10回記念シンポジウム「外国語教育の未来(あす)を拓く～持続可能な未来を創るための外国語教育～」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 縣由衣子, 山田仁
2. 発表標題 フランス語文法に_する「反転授業」についての報告
3. 学会等名 日本フランス語教育学会主催「Journ_e p_dagogique de la langue fran_aise 2021」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 境一三
2. 発表標題 多言語・多文化化する日本社会とJACTFLの活動
3. 学会等名 第8回 JaF-DaF フォーラム (オンライン) (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山下一夫, 境一三, 吉川龍生, 縣由衣子, 山下誠
2. 発表標題 外国語教育における 3 つの資質・能力とパフォーマンス評価 高大協働による取り組み
3. 学会等名 第9回JACTFLシンポジウム (オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池谷 尚美・吉村創・鈴木 冴子・境一三
2. 発表標題 「生徒の資質・能力を育成するための授業設計とその評価」 逆向き設計を取り入れたパフォーマンス評価の効果
3. 学会等名 日本独文学会春季研究発表会 (オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 境一三
2. 発表標題 英語学習だけでは得られない、複言語学習での学びの広がりや深まり
3. 学会等名 文部科学省委託事業「グローバル化に対応した外国語教育研究事業」講演会・報告会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 境一三
2. 発表標題 これからの外国語教育を考える 英語そして英語以外の外国語の「力」を育成するために 複言語能力養成の観点から
3. 学会等名 明治学院大学教養教育センター主催外国語教育FD研修（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉川龍生
2. 発表標題 關於日本學校裡的華語教學與Lexplore實踐研究
3. 学会等名 國立政治大學華語文教學碩博士學位學程演講會（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 吉川龍生, 深谷圭助
2. 発表標題 A supplemental package of vocabulary teaching tools for improving autonomous learning and metacognitive abilities in Chinese language education: Integrating paper dictionaries and digital technology
3. 学会等名 英国中国語教育学会（BCLTS）年次国際会議（英国・エディンバラ大学）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉川龍生, 荻野友範, 深谷圭助
2. 発表標題 高等学校での実践データに基づく中国語「辞書引き学習」導入パッケージ
3. 学会等名 中国語教育学会 第21回全国大会 (2023年度)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山下一夫
2. 発表標題 変わる外国語教育・変える外国語教育 逆向き設計からの授業デザイン
3. 学会等名 2023年度明治学院大学教養教育センター主催外国語教育FD研修会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山下一夫
2. 発表標題 「主体的・対話的で深い学び」とは 外国語科目の授業設計を例に
3. 学会等名 2023年度一橋大学アカデミック・キャリア講習会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 境一三
2. 発表標題 新学習指導要領は大学教育にどのような変化をもたらすのか? - 資質・能力論を中心に考える -
3. 学会等名 高知大学共通教育実施委員会 外国語分科会主催 FD講演会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 境一三
2. 発表標題 日本に複言語主義は必要か？－ヨーロッパとの対比で－
3. 学会等名 獨協大学外国語教育研究所主催第13回公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 境一三
2. 発表標題 ヨーロッパにおける多言語状態と複言語主義
3. 学会等名 第110回日本エスペラント大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Sungwoo Kim・Kyongche Kim・Moran Kim・Jin-gyu Kim・Ki-in Chong
2. 発表標題 K-POPミュージック・ビデオを活用した韓国語および韓国文化のマルチリテラシー教育
3. 学会等名 韓国人文社会科学会2023春季学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金景彩
2. 発表標題 マルチリテラシー育成を目指した韓国語教育
3. 学会等名 朝鮮語教育学会第93回例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤田邦彦, 新谷真由, 縣由衣子
2. 発表標題 自由記述で探る非英語専攻学生の国際的志向性と動機付け
3. 学会等名 日本教育工学会 2023年秋季全国大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 境 一三、山下 一夫、吉川 龍生、縣 由衣子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 186
3. 書名 外国語教育を変えるために	

1. 著者名 太田達也, 境一三, 佐藤プリンツ・マヌエラ, 丸山智子 編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 iudicium Verlag	5. 総ページ数 177
3. 書名 多言語教育の意義とは? 外国語教育・学習研究に関する国際シンポジウム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	境 一三 (SAKAI Kazumi) (80215582)	獨協大学・外国語学部・教授 (32406)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山下 一夫 (YAMASHITA Kazuo) (20383383)	慶應義塾大学・理工学部（日吉）・教授 (32612)	
研究分担者	縣 由衣子 (AGATA Yuiko) (30847869)	慶應義塾大学・外国語教育研究センター（日吉）・講師 (32612)	
研究分担者	金 景彩 (KIM Kyongche) (50962437)	慶應義塾大学・外国語教育研究センター（日吉）・助教 (32612)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関